

シモノカミの初瀬徳左右衛門も大水にまつわるエピソードの持ち主だ。無印はもとより一緒に引き揚げた烙印のあるものまで、全て自分のものにしてしまったことがあるのである。徳左右衛門は烙印を打ってある木口を切り落としてしまうことで引き揚げた材木をみんな無印に変え、山持ちたちの抗議を平然と聞き流してしまったものだ。

山持ちたちが上手から、自分の山の木がどこに何本、どこに何石と帳付けしながら下流へ下ってくるには時間がかかる。徳左右衛門が夜中に起き

る神宮寺のオジュツサン、初瀬瞭然師であろう。いとことはいっても年齢は伯父と甥くらい違う。徳左右衛門が流木をみごとさっぱり横領したとき、花ノ根村が驚いたのはやりかたの強引きもさることながら、それをやりぬいた徳左右衛門が若かったからであった。いま、シモノカミでは村議会議員の多山健吾が世論を代表しているかたちだが、遠からず徳左右衛門がそれにとって代わるだろうとみられている。

瞭然師は敬虔な信徒である。仏教革命が到来す

出して木口を挽き切っているのを見たという者もいたが、山持ちは一人でないし、証拠もないままにうやむやになってしまったのである。

杣夫たちは山持ちから嚴重に烙印打ちを要求されるが、打ち落としはいまだになくならない。旦那たちの損は自分たちの損という考え方になればともかく、彼らは旦那たちの利益が自分たちの利益になったためしがないのを長い経験からよくわきまえていたのである。

徳左右衛門が悪評のただ中に立ったとき、誰よりも気をもみ、苦にがしく考えたのは従兄弟であ

るものと、しんじつ信じている。しかしその日が来るには世界の大多数の人が仏教徒にならなければならぬと考える点では現実的だ。いかにして仏教を広めるか、日夜思いをめぐらしている。先祖を祀るのに仏教は借りても、日常の精神の支えとして釈迦の御教えを考えようとする世情が、瞭然師にはいたく不満なのである。神宮寺へ人を集めること。人が集まれば、仏教から何かを得て帰るだろうというのがオジュツサンの考えた布教の第一歩だった。

彼はまずこの花ノ根最大の行事である産土神社の秋祭りに目をつけた。境内が隣接しているのを幸いに、祭りに集まる露天商が神宮寺でも商いできる便宜をはかった。当然、秋祭りには神宮寺境内にもぎわう結果を呼んだ。それどころか、阿弥陀如来像の前の賽銭箱の中味がふえているのを発見したものである。祭りの日をねらって行なうオジュツサンのお説教に人はふえなかったが、お賽銭は確実にふえていたのである。

事、志と異なつた結果になつて、オジュツサ

初太郎氏は、花祭りを盛大にするといつたオジュツサンの計画にまるで積極的でない。産土神社の秋祭りは、この花ノ根の住人にとって、神事である以上にレクリエーションであり、社交場であり、ファッションショーであることを知っている。秋祭りにきた人がついでに神宮寺へ参つたとしても、それはとるに足りないことだし、花祭りにきた人が産土神社へ賽銭を上げるかどうかには疑問を抱いているからである。

初太郎氏は、大東亜戦争が始まつてからこのお

ンはひそかに尊者へ謝罪の勤行をした。一方オジュツサンの奥さんは、祭りの日には般若湯を欠かさず食膳にのぼすことにもなつた。もとより嫌いなたちでないから、つい飲んでしまふ瞭然さんが、そのたびにそこはかとなひ罪深さを味わうのも事実なのである。

初瀬瞭然師、こんどは春の花祭りを盛大にして、神社の方へも広大無辺の仏恩を分かとうと考え

ている。

オタクウサン、つまり産土神社の宮司、東雲

社の前で出征兵士の武運長久を祈願する神事がひんばんに行なわれた頃を懐かしく回想する。武運長久とは、つまりは戦死しないことであり、それを念入りに祈つてもらふためには神さまへ他人より多くの賽銭を上げることが効果的だと考えた村人が多かったからである。上座へすわつての壮行会も嬉しいものであつた。

初太郎は考える。

平和は悪いものじゃない。しかし神道が正当な位置を占める意味で、戦争はもつと悪いものでは

ない。大東亜戦争の犠牲は確かに小さくはなかった。この村から出ていった兵士はバター半島の戦いとビルマ作戦で大半が名誉の戦死を遂げてしまったのだから。しかし、そのおかげで戦後、大東亜戦争で日本が掲げた大義名分、東南アジア諸国の独立はりっぱに達成されたのである。

秋祭りは盛大に復活しても、世間の秩序は回復しなかった。混乱した社会を建て直すため、もう一度日本は戦争しなければならぬのではないかと、宮司、東雲初太郎氏は真剣に考えている。

突撃を敢行した。前方に横たわる三重もの鉄条網を切り破るのにどれほど多くの戦死者を出したかわからなかった。荊棘鉄線に倒れかかったまま戦死した戦友の屍を踏んで突っこんでいった。「痛かろう、許せ」と戦友の霊に詫びながら踏みこえていった。敵の重機関銃はわが軍に對して扇状の弾幕を張っていた。それでも誰ひとりひるむことなく突っこんだ。将棋倒しという表現は真実だ。そこで砲弾に吹つとばされた吉次には、あとの記憶はない。次に気がついたのは

いうまでもなく、再び戦争が始まれば、オジュツサンのいう花祭りの盛大化などという姑息な手段はけし飛んでしまうこと間違いない。

カミノイリの桑田吉次も第二次大戦帰りの勇士の一人だ。吉次の体の中には今でも砲弾の破片が二つ残っているという。中支の奥地の戦線で瀕死の重傷を負ったときの名残りだった。酒宴などの席で、このときの戦闘の話をするのが彼の自慢だ。

中隊は一キロほどの横隊になって敵の塹壕へ包帯所、次は野戦病院のベッドだったからだという。吉次の話によくわかり、勇ましかった。何回もくり返されて絶妙な話術さえ感じさせられた。

が、もちろん、この吉次の戦争譚はとんでもない嘘っぱちである。カンのいい人なら敵に向かつて突っこんでいる一兵卒の目に、一キロにわたる横隊とか扇状に弾幕を張る敵重機などという観察が不可能なことは、ちよつと考えてもわかるであろう。

吉次は食糧徴発に出されて帰る途中、せつか

綱をかけていた黒豚が逃げ出したのを追って道なき道<sup>みち</sup>を走るうち、敵<sup>てき</sup>のものとも味方<sup>みかた</sup>のものとも知れぬ不発弾<sup>ふはつだん</sup>の一つにぶつかってしまったのである。この話<sup>はなし</sup>には現実<sup>げんじつ</sup>の戦闘<sup>せんとう</sup>の不気味<sup>ぶきみ</sup>さ、悲惨<sup>ひさん</sup>さとの非情<sup>ひじょう</sup>さがある。吉次<sup>よしつぐ</sup>の脚色<sup>きゃくしやく</sup>はこの男<sup>おとこ</sup>の性格<sup>せいかく</sup>をそのまま表<sup>あらわ</sup>わしているようだ。彼<sup>かれ</sup>には大きいもの、強いものに憧<sup>あこが</sup>れてやまない小児病的<sup>せうじびてき</sup>コンプレックスがある。

吉次<sup>よしつぐ</sup>が兵役<sup>へいえき</sup>から帰<sup>かえ</sup>って間<sup>ま</sup>もなく、納屋<sup>なや</sup>が台風<sup>たいふう</sup>で倒壊<sup>たうかい</sup>し、父親<sup>ちちおや</sup>が死<sup>し</sup>んだ。再建<sup>さいけん</sup>に際<sup>さい</sup>して吉次<sup>よしつぐ</sup>は自分の

だ。二カ月<sup>にかげつ</sup>たたぬうちにあぶなつかしくて入れなくなり、吉次<sup>よしつぐ</sup>はよんどころなく外側<sup>そとがわ</sup>から六本<sup>ろっぽん</sup>の突っぱりを当<sup>あ</sup>てがわねばならなかった。そのうち「吉次<sup>よしつぐ</sup>の納屋<sup>なや</sup>じゃないけれど、どうにも足<sup>あし</sup>がふらついて」といったふうの俚諺<sup>りげん</sup>が生まれるかもしれない。

吉次<sup>よしつぐ</sup>が第二次世界大戦<sup>だいにじせかいたいせん</sup>の英雄<sup>えいゆう</sup>なら、カミノヒガシのいちばん奥<sup>おく</sup>に住<sup>す</sup>む滝<sup>たき</sup>の仁作<sup>にさく</sup>は日露戦役<sup>にろせんえき</sup>の勇士<sup>ゆうし</sup>だ。吉次<sup>よしつぐ</sup>が帰<sup>かえ</sup>ってからはぐつと色<sup>いろ</sup>あせたためといえなくもないが、この仁作<sup>にさく</sup>、もともと戦争<sup>せんそう</sup>の話<sup>はなし</sup>をあまりしたがらなかった。

持ち山<sup>もちやま</sup>からとてつもなく大きい松<sup>まつ</sup>を二本<sup>にほん</sup>も切り出してきて、それぞれ納屋<sup>なや</sup>の棟木<sup>むなぎ</sup>と大黒柱<sup>だいこくじゆう</sup>をつくった。大黒柱<sup>だいこくじゆう</sup>のある納屋<sup>なや</sup>なんぞ、さすがの花<sup>はな</sup>ノ根<sup>ね</sup>でも前代<sup>ぜんだい</sup>未聞<sup>みもん</sup>であったから、これは評判<sup>ひやうばん</sup>を呼<sup>よ</sup>んだ。カミノイリの男<sup>おとこ</sup>好き<sup>こ</sup>な後家<sup>ごけ</sup>、木戸<sup>きど</sup>ゆいは吉次<sup>よしつぐ</sup>を「太<sup>ふと</sup>いばかりというのも考え<sup>かんが</sup>えものであります」何<sup>なに</sup>やら意味<sup>いみ</sup>のよく通<sup>とお</sup>らないことをいつて窘<sup>たしな</sup>めたものだったが、おゆい後家<sup>ごけ</sup>のいうとおりに吉次<sup>よしつぐ</sup>の納屋<sup>なや</sup>は棟<sup>むね</sup>上げするが早<sup>はや</sup>いか、よちよち歩<sup>ある</sup>きの幼<sup>おさ</sup>な子<sup>こ</sup>がカブトをかぶせられたように頼<sup>たよ</sup>りなくゆらい

「戦友<sup>せんゆう</sup>がどんどん戦死<sup>せんし</sup>したのでありましようね」と水<sup>みず</sup>を向<sup>む</sup>けても

「はい、そうです。たくさん死<sup>し</sup>んだものであります」

だけ。張<sup>は</sup>りあいが無い。

「仁作<sup>にさく</sup>さんよ、あなたはいったい敵<sup>てき</sup>を殺<sup>ころ</sup>したのでありますか」

と問<sup>と</sup>いつめても

「そうでありますねえ、なんせ鉄砲<sup>てつぱう</sup>だけを塹壕<sup>ざんごう</sup>から突<sup>つ</sup>き出して撃<sup>う</sup>ったのでありますから、当<sup>あ</sup>たりましたか当<sup>あ</sup>たりませなんだか、まあ、たくさん撃<sup>う</sup>つ

たなかには当たったのもあったかも知れせんねえ」

「はなはだ締まらない。吉次の話に較べて、あまりにも聞き応えがないので、花ノ根の住人は滝の仁作を相変わらず小馬鹿にするのだが、塹壕から歩兵銃だけ突き出して射撃した仁作と、黒豚と心中しそこねた吉次と、どちらが勇者であったと判定するか、それは主観の相違にすぎないであろう。

(以上7月2日放送分)